



新収作品：ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴイルの浜》
New Acquisition: Eugène Boudin, *Beach of Trouville*

昭和60年度の新収作品および当館活動の概略について

On the New Acquisitions and the Main Activities of 1985

1. 新収作品

本年度の新収作品の主体をなすものは、ウジェーヌ・ブーダンの油彩画《トルーヴィルの浜》1点である。即ち年間購入予算の全額を投入したことになる。モネの絵画を多数所蔵する当館としてその師ブーダンの佳作を獲得することは長年の念願であった。今日市場に出る彼の作品は必ずしも少いとは言えないが、多くは小品であって代表作とするには物足りない。そのためこれまで購入を見送って来たが、いま漸くこの傑作を蔵品中に加えることができたのは大きな喜びである。

ウジェーヌ・ブーダン(1824-1898)は若くして画材商となり次第に自らも絵筆をとるようになった人と言われるが、1859年にはサロンに出品して初入選した。画家を志す少年モネと識合って感化を与えたのもその頃のことであった。本作品は年記の示すごとく1867(慶応3)年のサロン出品作であって、画家43歳の年に当る。海浜風景はブーダンが生涯に亘って描き続けた、しかも殆ど唯一の主題であった。彼の芸風のすべては挙げてこの一作中に籠められていると言うも過言ではない。ここから印象派への道は最早や遠くはない。当館所蔵のモネの絵画中もっとも早いと目される《並木道》がほぼ同期の作、またマネの《花の中の子供》(1876年)はブーダンのこの絵より9年後、そしてゴーガンの《水浴の女たち》(1886年)が19年後の作であることを想うと興は尽きない。このように松方コレクションの補強という見地からしても本ブーダン作品の入手は極めて意義深きものがあつた。

他の新収品はすべて受贈作品であり、寄贈者各位の御厚志に対し改めて御礼申し上げる次第である。それらの中、マックス・クリンガーの12点の連作版画《聞奏曲》は、当館のクリンガー収集をさらに充実させるものである。

2. 展覧会

本館での松方コレクションおよび新館での購入作品の常時陳列の他に、今年は春に「点描の画家たち」、秋に「ゴッホ展」、そして年を越して「近世ヨーロッパ素描名作展」の三つの特別展を開催した。これらの中、最後の素描展が本年度の自主展である。

先ず「点描の画家たち」(朝日新聞社と共催)は新印象派において全く新しい意義を獲得した点描技法が、その後の西洋絵画でどのような展開発展をもたらしたかを見

ようとする。キュビズムやフォーヴィスム、あるいは表現主義の作品をも加えたこの展観が、「新印象派展」ではなく「点描の画家たち」と題された所以である。主体をなす新印象派では殊にシニャックの佳作（例えば《フェネオンの肖像》など）が多く集められ、また当館所蔵のマルタン等の作品を常陳とは違った雰囲気の中で正しい位置付けをもって眺めることができたのは印象に残った。

「ゴッホ展」（東京新聞、中部日本放送と共催）は我が国では三回目、また当館で二度目のこの画家の個展である。出陳総数 101 点は画家の生国オランダを始め11ヶ国の公私立のコレクションから寄せられた。展示ではこれらをファン・ゴッホの芸術形成にそれぞれの時期で大きな影響を与えたとされる要素別に分類整理し、1. イギリス、2. オランダ、3. フランス、4. 日本、そして 5. 総合の5部門から構成される極めてユニークな展観であった。本展の企画の当初よりオランダからファン・デル・ウォルク、イギリスからピックヴァンス、日本から高階秀爾三氏の他に当館担当学芸員が加った学術委員会が組織されて構想を練りまた出品交渉に当たった。後述するシンポジウムもこの委員会の発案になるものであった。このような姿勢が出品作の量と質とをともに高める結果となったことは、今後の展覧会の在り方に関しても頗る示唆的であったと言わなければならない。

最後の「近世ヨーロッパ素描名作展」はドレスデン版画素描館所蔵の作品をもって構成された。時代的には15—18世紀、地域的にはドイツ、ネーデルラント、オランダ、フランス、イタリアに跨る。19世紀以降を含まないのは、何れ機を改めてそれだけの展示を行いたいとする意図があったからである。素描を見る楽しみはその味を知る人々にのみ許される特権とも言える。それだけにこの種の展観に際しては一般観客への啓蒙が要求される。また紙上の芸術という点からは我が水墨画などとの対比において素描の概念を検討することが必要であろう。予算の制約から自主展には今後も版画や素描の展示が多いと思われるが、西洋美術館として一貫した見識を持するとともに、さまざまな工夫が重ねられて行くことを望んで止まない。

3. シンポジウム

前項中の「ゴッホ展」に関連して触れたように、この展覧会を契機として内外からファン・ゴッホ研究の専門家を招いて国際シンポジウムが10月17日より3日間に亘り東京の日本プレスセンターにて開催された。これは昭和55年の「イタリア・ルネッサンス展」、59年の「ドイツ美術展」に際しそれぞれ行われた国立西洋美術館主催の国際シンポジウムに次ぐ3度目の企画である。

3日間に亘るプログラムは次のごとくである。

第1日

開会の辞 前川誠郎（国立西洋美術館）

「ゴッホの肖像画についての新視点」

有川治男（国立西洋美術館）

「友人によるゴッホの思い出」

ハン・ファン・クリンペン（フィンセント・ファン・ゴッホ美術館）

「ゴッホと19世紀の神学者」

関府寺 司（アムステルダム大学）

「ゴッホの絵画にみる英国の影響」

八重樫春樹（国立西洋美術館）

「ハーグ派とゴッホ」

ヨーン・シレフィス（ハーグ市立美術館）

「ゴッホと新印象派の周辺」

フランソワーズ・カシャン（オルセ美術館）

第2日

「2点のガッシュ博士の肖像画について」

池上忠治（神戸大学）

「ゴッホの絵画にみる日本の影響」

ヨハネス・ファン・デル・ウォルク（クレラー＝ミュラー美術館）

「日本におけるゴッホ受容について」

匠 秀夫（美術史家）

第3日

「プロヴァンスとオーヴェールにおけるゴッホの足跡について」

ジョン・リウォルド（ニューヨーク市立大学）

「ゴッホの《夜のカフェ》：制作における総合」

ロナルド・ピックヴァンス（美術史家）

「ゴッホと装飾」

ローラント・ドルン（マンハイム市立美術館）

「ゴッホとフランス文学」

高階秀爾（東京大学）

「20世紀初頭の美術に及ぼしたゴッホの影響」

セオドア・レフ（コロンビア大学）

閉会の辞 高階秀爾

このように内外からあるいは老練あるいは新進の秀れたゴッホ乃至近代美術の研究者が展覧会を機として一堂に会し充実した内容の発表を行ったことは、今回のゴッホ展の声価を高揚するものであって喜びに堪えない。各発表のテキストは近く一本にまとめて公刊される予定である。

4. おわりに

本年度も国立西洋美術館の歩みは順調であった。我が国が外国へ向けて開いている重要な窓口の一つとしての自覚は、そのすべての活動によく反映されている。展覧会に関しては共催展の場合にも企画の最初から当館が関与して相手側美術館との協議を重ねつつ全体構想を作り上げて行くというルールが今や定着したかに見受けられる。また作品購入については本年度は偶々ブーダンの佳品を取得したが、単に印象派等のフランス19世紀美術に限ることなく、特にそれ以前の西洋美術の各分野へも触手を延ばして、総合的な見地からする松方コレクションの補強へ向けて努力を続けて行く所存である。

館長 前川誠郎